

# 東 櫓

ひがしやぐら



東櫓は譜代大名西尾氏が土浦城主であったときに建てられたと伝えられ、西櫓とともに東西の土塁の上に存在していました。

「櫓」は、もともとは城の防御の拠点の一つとしての物見の役割や、武器庫の役割をもった建物でした。それに加えて、江戸時代の東櫓は貴重品などを入れておく文庫蔵の役割を果たしたと考えられます。

東櫓は明治時代の火災で本丸館とともに失われたと言われていましたが、平成10年（1998）に復元完成されました。

新しい東櫓は江戸時代の建築技術を継承しながら現代工法も取り入れた建物となっており、土浦市立博物館の附属展示館として土浦城の紹介をしています。

- 構造形式 木造本瓦葺き 二階建（二層二階）  
入母屋造り
- 1階 4間×5間＝20坪
- 2階 3間×4間＝12坪 計32坪（約111.1㎡）  
（1間＝約1.86mで換算）



西櫓は昭和24年（1949）キティ台風の被害を受け、後に復元を前提として解体されました。土塁上には礎石のみが残されていましたが、平成3年（1991）に復元完成されました。※内部は公開していません。

- 構造形式 木造本瓦葺き 二階建（二層二階）  
入母屋造り
- 1階 3間×4間＝12坪
- 2階 2間×3間＝6坪 計18坪  
（約62.5㎡）



櫓門は明暦2年（1656）に改築されたと伝えられ、本丸にある櫓門としては関東地方では唯一現存するものです。階上に太鼓を置き、時を知らせていたことから、太鼓櫓とも呼ばれていました。昭和61～62年（1986～87）に解体修理されました。

- 構造形式 木造本瓦葺き  
入母屋造り  
階上 11.1坪（約38.5㎡）

なお、この他にも土浦城に関する建造物として、公園内に霞門（本丸裏門）、旧前川口門があります。

# 本丸土塀

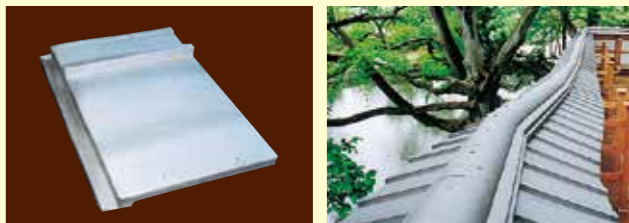
ほんまるどべい



本丸土塁上に建つ塀は、表（濠側）を塗込めの大壁、裏（本丸側）を柱・貫のみえる真壁にして漆喰で仕上げた土塀です。塀には石落しや鉄砲狭間・大筒狭間が設置されています。これらは防御施設であるとともに城を象徴する意匠でもあります。



構造 控柱付きの土塀は、土台・柱・貫・棟木等の木造軸組と竹木舞を下地とした土壁で造られており、漆喰を塗り仕上げられています。



瓦は目板瓦（板塀瓦）で主に塀の屋根を葺く瓦です。復元した目板瓦には、垂れが無く、下駄と呼ばれるずれ止めが付いた珍しい形のものです。



石落しは下から登って来る兵に対して、上から槍や鉄砲で攻めたり熱湯を浴びせたりすることを想定して造られた施設です。形は袴の広がりをもつ傾斜で突き出した袴腰型の石落しです。土塁上の塀に設置された石落しはあまり類例がありません。



狭間の種類には、矢狭間・鉄砲狭間・大筒狭間などがあります。○は丸狭間、□は箱狭間、△は鑄狭間と呼ばれる鉄砲狭間であり、扉の付いたものが大筒狭間です。表に向かい先が錐形に絞られていて「あがき」と呼ばれています。